



The Excursions of
Mr. Brouček
VOL. 4 (最終回)

「九人」の台本作者とヤナーチェクの音楽

オペラ 《プロウチェク氏の旅行》の世界

一丸本隆 Takashi Marumoto
早稲田大学教授・演劇学/オピニオン

《プロウチェク氏の旅行》が、時空を超越した「月」と「15世紀」二つの異世界で繰り広げられる奇想天外な物語と聞けば、大いに興味を掻き立てられる。ところがこのオペラは1920年の初演以来、それほど多く上演されてこなかった。舞台化を難しくしてきた要因についてはあれこれ議論されてきたが、その一つが台本にあることは間違いない。

チェコ語で甲虫を意味するプロウチェクは、どこにでもいる普通の市民だ。家主なので多少は恵まれた境遇にあるが、借家人が家賃を払わなかったり、税金が高かったりと心配の種が付きまわっている。行きつけの飲み屋で痛飲したあと空を見上げると、ぼっかり浮かぶ月が世上の悩みとは無縁の世界に思われてくる。すると体が持ち上がり、ふわふわと月に向かって飛んで行く。ところが月面に到着したプロウチェクが目にするのは、思ったほど素敵な光景ではない。住人たちは花の香りを命の糧とし、詩を語るように美辞麗句を並べ続けるが、俗事にはまったく興味を示さない。

そうした浮世離れた人々にかこつけてヤナーチェクは、社会の出来事に無頓着な、同時代の(特に彼を冷遇したプラハの)唯美主義的な芸術家たちを揶揄しようとした。問題は、そのような世界でもひたすら飲食にこだわるプロウチェクが、共感を呼ぶ「俗人」として、「変人」の対抗軸に位置づけられているのに対し、後半では一転して、人々が敢然と皇帝軍に立ち向かう中でただ一人敵前逃亡するという、否定的な「俗人」となることである。原作者チェフが15世紀のプラハを呼び出すという設定で前後をつなぎ、作品の整合性を担保しようとする意図が伺われるものの、主人公の一貫性を欠く扱いに、観客はとまどってしまうかもしれない。

こうした不統一感は、作品の成立事情によるところが大きい。「月旅行」の台本制作には8人もの作者が次々と加わっては降板し、ヤナーチェク自身も執筆に大きく関わる中で、完成までに9年の歳月を要したという。ヤナーチェクは当初、その部分だけを舞台にかける準備をしていたが、急遽「15世紀への旅」を付け足すことにした。「月旅行」だけでは一晩の上演には短すぎることもあったが、第一次大戦からチェコの独立へと向かう新たな激動の時代に直面した彼が、勇気に欠け自己保身に汲々とする同胞に、かつての誉れ高い時代を想起させたく思ったことが、それ以上の動機となった。今度はただ一人の作者との協力で、作業は短期間で完了した。こうして作品全体に不統一な印象が拡散する結果となった。

さらには「月旅行」のような、時局批判を主眼とし、言葉のあやが大きな意味をもつ風刺喜劇は、時代や文化圏を超えて説得力をもち続けることが容易でないという点がある。筋に起伏が乏しいのも不利な材料だ。加えて、荘重なトーンの支配する後半はむしろ悲劇的で、この意味でも一貫性に欠ける。

このオペラの「不人気」の背景には、確かに以上のような点があるかもしれない。しかし近年、演出家が原作の仲介者の枠を超え「作者」として主導的に舞台創造に関与する「演出演劇」的な傾向が強まり、オリジ

ナル台本のあり方が絶対的意味を失いつつある中で、《プロウチェク氏》のようなオペラにもチャンスが広がってきた。そうした演出法にとっては、台本のまとまり以上に、多義的解釈を許容するテーマの普遍性や、現代に直結するアクチュアリティが潜在することが鍵となる。その点、月の鏡に地球の姿を映し出すモチーフは、我々の現実を批判的な距離をもって眺めるための仕掛けとして、豊かな可能性を秘めている。初演時すでに、偏狭な愛国主義への共感を強いるとして批判の的となった、フス教徒のドイツ皇帝軍との対決のテーマも、現代の観客に戦争や社会変革について多角的な思考を挑発するための筋立に転換することで、上演の幅が広がるかもしれない。1992年のロンドンで、その3年前にチェコの「ピロード革命」で活躍した大統領ハヴェルの仮面をつけてチェフを登場させたバウントニー演出も、その一例といえる。

だがそうした舞台がオペラとして成立するためには、音楽が優れていることが必須条件となる。その点で《プロウチェク氏》は有望だ。というのはこのオペラが、もともと音楽面では高く評価されてきたからだ。そのことはまず冒頭の導入部に耳を傾けると実感できる。低音の管楽混じりの、不安を掻き立てるようなダンス風の曲と、続いて現れる弦主体の叙情的な、夜明けのようなメロディーの、二つの鋭く対照をなすモチーフが、せめぎあいながら次第に劇的な高まりを見せ、打楽器の轟音とともに大きな物語を予感させるかのように、ドラマの核心へと展開していく。

このように音楽が劇内容とかみ合い高い表現効果をあげている例は、作品のいたるところで見られる。月の世界の芸術家たちを揶揄する諧謔的な調子、マザールとマリカが仲直りの言葉を交わす、弦楽の和音とイングリッシュホルンが響きあう情緒的な雰囲気、ヒロイックなファンファーレの響きや壮麗な聖歌の合唱が醸し出す戦いの荘厳な気分等々、それぞれの情景に応じた音楽的着想が、コラージュのように多様に散りばめられている。ペガサスにまたがり威風堂々と月を去るプロウチェクと、フス教徒たちに火刑に処せられようとしたとたん夢から覚めるプロウチェクの、二つの「帰還」の様子が音楽的にどのように描き分けられているか、比較してみるのも興味深い。

このオペラにとりわけ特徴的なのは、話すような旋律曲線を描く歌唱法だ。一見リアルだが絶叫調ともいえる断片的なフレーズの連続からなり、一種の楽器のようにオーケストラと融けあうこの様式を、ヤナーチェクは故郷モラヴィアの人々の話し言葉の詳細な研究を通じて創出し、このオペラにも取り入れようとした。オペラの分野で伝統的なロマン主義から出発したヤナーチェクは、やがて印象主義を基調とする斬新な音楽語法を確立するが、その象徴的な現われがこの歌唱法であり、その本格的な転換点となるのが《プロウチェク氏》である。「ヤナーチェクの絶頂期の音楽がこのような台本のために書かれたのは残念」とする見解すらあるが、実は台本をめぐる紆余曲折を体験することによって、ヤナーチェクは新しいオペラへの大きな一歩を刻むことができたのではなかろうか。



チェコの街並